

上代漢字定訓考証 — 『万葉集』を資料として —

A Study of Established Readings for Chinese Characters Used in Old Japanese.

峰 岸 明 (国語国文学教室)

By Akira MINEGISHI (Dept. of Jap. Literature)

例 言

1 本稿は、「上代における漢字の定訓について」(『横浜国大語研究』二、昭和59年3月)に掲載し得なかった、その論述に関わる基本資料の提示を中心に、そこに尚述べ残したところを補足したものである。

2 本稿の前半には、上代における漢字の定訓についてその語形を根拠となる資料と共に提示し、後半には、上代における常用の漢字をその使用例と共に提示する。この稿では、それらの事実を『万葉集』に限りて示したが、同様の事態は、他の上代文献についても観察されるものと予想される。殊に、常用の漢字については、この稿における帰結の検証が他の多くの文献における使用漢字の調査に依って可能であろう。但し、それらに依る検証は、今後に俟つものである。

3 資料の提示に当たって、漢字の定訓については、根拠となる借字表記例を一例示すに止め、又常用の漢字については、代表例を例示するに止めた。

4 例示に当たって、漢字の定訓については、先ず当該漢字を示し、それら各漢字についてその定訓の語形を片仮名小書で記し、次いで、根拠となる借字表記例を『万葉集』の本文に拠って文節単位で揭示した。即ち、

足ア 足白〔網代〕(巻七、一一三七)

鶴ツル 相見鶴鴨八助動詞V(巻一、八一)

で説明すると、その定訓の語形・根拠となる借字表記例・表記された語の語義(相当する漢字表記を「」で示す)乃至用法(その職能を「」で示す)・『万葉集』の歌番号がその順序で示される。又、常用の漢字については、当該語を見出しとして平仮名で記し、その下にその語の表記に供された漢字を『万葉集』におけるその使用例数と共に示し、更に、その使用例を()に入れて文節単位で掲出する(中で、使用度の最も高い漢字を常用の漢字と見るのである)。例えば、

あ 足9 (足ト…)

などの如くである。

5 定訓抽出のための資料として和語の借字表記を利用するのは、前

掲拙稿で詳述したように、それが語形表示の表音機能のみを有すると見られるからである。

6 『万葉集』について常用の漢字を調査したのは、それらと漢字の定訓との相関を検証するためでもあるが、尚上代における常用漢字確認のための基礎資料としようとする意図もある。

一 上代における漢字の定訓

足^ア 足白〔網代〕(巻七、一一三七)
 秋^{アキ} 秋足目八方〔飽〕(巻六、九三二)
 朝^{アサ} 朝入為等〔求〕(巻七、一一六七)
 足^{(ア)シ} 荒足鴨〔嵐〕(巻七、一一〇二)
 味^{アヂ} 味村〔鵲群〕(巻三、二五七)
 小豆^{アヅキ} 小豆鳴〔味気無〕(巻一一、二五八〇)
 穴^{アナ} 穴^ハ感動詞^ノ〔巻八、一四五四〕
 妹^{(ア)ネ} 名妹之〔汝カ〕(巻四、七二四)
 合^{(ア)フ} 隠合^ハ接辞^ノ〔巻一〇、一九八〇〕
 相^{アフ} 相市乃〔棟〕(巻一〇、一九七三)
 会^{(ア)ヒ} 菟会処女乃〔菟原処女〕(巻九、一八〇二)
 〔↓アフ〕
 蟻^{アリ} 蟻待〔有〕(巻四、六六七)
 荒^{アル} 荒鹿〔有〕(巻四、六六六)

藍^{(ア)キ} 狹藍左謂沈〔騒カ〕(巻四、五〇三)
 五十^イ 五十狹迹迹哉〔不知〕(巻一六、三七九二)
 生^{イキ} 生緒尔〔息緒〕(巻一一、二七八八)
 〔↓イク〕
 石^{(イ)シ} 恋石見〔恋〕(巻三、三八二)
 板^{イタ} 板敢〔甚〕(巻一〇、二三三八)
 痛^{イタ(シ)} 痛毛〔甚〕(巻三、四五六)
 市^{イチ} 市白霜〔著〕(巻一〇、二二五五)
 五^{イツ} 五可新付〔殿櫃〕(巻一、九)
 泉^{(イ)ツミ} 庭多泉〔庭潦〕(巻二、一七八)
 去^{(イ)ニ} 雲隠去寸^ハ助動詞^ノ〔巻三、四六一〕
 〔↓イス〕
 稻^{イネ} 稻金津〔寝〕(巻一一、二五八七)
 石^{イハ} 石相〔齋〕(巻一三、三二八四)
 飯^{(イ)ヒ} 得飼飯而〔祈誓〕(巻四、七六七)
 言^{イフ} 言借〔訝〕(巻四、六四八)
 家^{(イ)ヘ} 去家之〔古〕(巻一一、二六二八)
 廬^{(イ)ホ} 垣廬鳴^ハ接辞^ノ〔巻一一、二四〇五〕
 五百^{イホ} 五百入〔廬〕(巻七、一二三八)
 入^{(イ)リ} 五百入〔廬〕(巻七、一二三八)
 〔↓イル〕

射 イ(ル) 射去為登〔漁〕(卷六、九三九)
 卯 ウ 卯管庭〔現〕(卷一三、三二八〇)
 菟 ウ 菟名日処女乃〔菟原処女〕(卷九、一八〇二)
 得 ウ 得干蚊〔浮〕(卷一一、二六四六)
 受 ウケ 受日鶴鴨〔祈誓〕(卷一一、二四三三)
 牛 ウシ 牛吐賜〔領〕(卷一一、一〇二二)
 空 ウツ 空蟬師〔現臣〕(卷二、一五〇)
 虚 ウツ 虚蟬毛〔現臣〕(卷一、一三)
 打 ウツ 打布裳〔顯〕(卷四、七七二)
 ト ウラ ト敷〔心〕(卷一、五)
 占 ウラ 占裳無〔心〕(卷一三、三三三九)
 浦 ウラ 浦乾来〔心〕(卷一一、二四六五)
 裏 ウラ 裏末之〔浦廻〕(卷九、一七九九)
 江 エ 等知波々江入助詞〔(卷二〇、四三四〇)〕
 息 オキ 息津藻〔冲藻〕(卷二、一三二)
 忍 オシ 忍照〔押照〕(卷六、九二八)
 押 オス 押日〔襲〕(卷三、三七九)
 負 (オ)ヒ 菟名負処女之〔菟原処女〕(卷九、一八〇九)
 (↓オフ)

大 オホ(キ) 大欲寸〔鬱悒〕(卷一六、三七九四)
 多 オホ(シ) 多公与〔大君〕(卷一、七九)
 覆 (オ)ホフ 丹覆〔句〕(卷二〇、二二一五)
 思 (オ)モヒ 足利思代〔率〕(卷九、一七一八)
 (↓オモフ)
 日 カ 五十日太尔〔筏〕(卷一、五二)
 香 カ 香切火之〔陽炎〕(卷二、二二三)
 蚊 カ 蚊寸垂〔搔〕(卷一六、三七九二)
 鹿 カ 妹乘良六鹿入助詞〔(卷一、四二)〕
 歟 カ 安虚歟毛入助詞〔(卷九、一七九二)〕
 之 ガ 見之根入助詞〔(卷一〇、一九〇六)〕
 垣 カキ 垣津幡駕〔杜若〕(卷七、一三四五)
 欠 カク 欠二毛〔斯〕(卷四、六二八)
 桎 カシ 夏桎〔懷〕(卷七、一一九五)
 炊 カシキ 奈都炊〔懷〕(卷七、一四四七)
 (↓カシク)
 借 カシ 言借〔訝〕(卷四、六四八)
 (↓カス)
 方 カタ 方見等曾〔形見〕(卷九、一七九七)
 形 カタ 為形〔姿〕(卷一一、二七八六)
 肩 カタ 肩恋丹〔片恋〕(卷二二、二九三三)

堅 カタ 酢堅〔姿〕(卷四、七七八)
 固 カタキ 待固〔難〕(卷二、二五〇三)
 勝 カツ 勝且毛〔且且〕(卷四、六五二)
 蟹 カニ 消蟹〔助詞〕(卷四、五九四)
 兼 カネ 麻知兼津〔難〕(卷一、三〇)
 金 カネ 止曾金鶴〔難〕(卷二、一七八)
 川 カハ 川津〔蝦〕(卷三、三五六)
 河 カハ 河津者〔蝦〕(卷三、三三四)
 ヒ カヒ 背七尔〔背向〕(卷六、九一七)
 亀 カメ 湯亀〔行〕(卷二、二九三)
 龜 カモ 来及龜常〔助詞〕(卷四、四九九)
 氈 カモ 珠氈〔助詞〕(卷七、一四一五)
 鳧 カモ 過不勝疊〔助詞〕(卷七、一一九〇)
 鴨 カモ 御代鴨〔助詞〕(卷一、三八)
 辛 カラ 石辛見〔柵〕(卷六、一〇四七)
 柄 カラ 心柄〔助詞〕(卷四、六九四)
 雁 カリ 名雁〔無〕(二、三〇三四)
 苜 カリ 苜音〔雁音〕(卷九、一七〇二)
 苜〔↓カル〕

借 カリ 言借石〔訝〕(卷九、一七五三)
 干 カレ 得干蚊〔浮〕(卷一、二六四六)
 輕 カル〔シ〕 酢輕成〔螺蠃〕(卷一〇、一九七九)
 寸 キ 寸食〔極〕(卷四、四八五)
 木 キ 奈木六香登〔和〕(卷四、七五三)
 杵 キ 丹杵火尔之〔柔〕(卷三、四八一)
 肝 (キ)モ 和豆肝〔助詞〕(卷一、五)
 切 キロ 香切火之〔陽炎〕(卷二、二二三)
 来 ク 四来〔好〕(卷一、二七)
 草 クサ 名草漏〔慰〕(卷四、五〇九)
 種 クサ 名種尔〔慰〕(卷七、一二五八)
 串 クシ 目串毛〔愛〕(卷九、一七五九)
 国 クニ 所念国〔接辭+助詞〕(卷三、三七二)
 雲 クモ 面智男雲〔接辭+助詞〕(卷二、一六〇)
 蜘蛛 クモ 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿〔鬱悵+助詞〕(卷二、二九九一)
 倉 クラ 日倉足者〔蜩〕(卷一〇、一九八二)
 栗 クリ 久栗縁乍〔括〕(卷一、二七九〇)
 暮 クレ 為暮〔時雨〕(卷一〇、二二三四)
 暮〔↓クル〕

毛_ケ 河毛但〔懸〕（卷一六、三八七八）
 食_ケ 食尔〔日〕（卷三、三七七）
 異_ケ 下咲異六八助動詞▽（卷六、九四一）
 飼_ケ 得飼飯而〔祈誓〕（卷四、七六七）
 子_コ 宮子波〔都〕（卷一、三六）
 木_コ 凝木敷〔凝〕（卷七、一三三二）
 籠_コ 八多籠良我〔農夫カ〕（卷二、一九三）
 社_{コソ} 君乎社八助動詞▽（卷四、六二九）
 事_{コト} 事負乃牛之〔牡牛〕（卷一六、三八三八）
 殊_{コト} 殊〔同〕（卷一〇、二三二七）
 琴_{コト} 琴〔同〕（卷一三、三三四六）
 米_{コメ} 米八方〔来＋助動詞〕（卷一〇、一八一三）
 凝_{コリ} 名凝〔波殘〕（卷四、五三三）
 狹_サ 五十狹迹迹哉〔不知〕（卷一六、三七九二）
 坂_{サカ} 玉坂〔偶〕（卷一一、二三九六）
 酒_{サケ} 酒嘗〔放〕（卷七、一四〇二）
 核_{サネ} 核延〔根〕（卷一一、二四七〇）
 沢_{サハ} 沢二〔多〕（卷一、三六）

障_{サヘ} 玉障八助動詞▽（卷七、一〇八二）
 寒_{サム} 於毛保寒蟲八助動詞▽（卷四、六五四）
 鮫_{サメ} 名具鮫兼天〔慰〕（卷二、一九四）
 去_{サリ} 射去為登〔漁〕（卷六、九三九）
 竿_サ 竿壯鹿之〔小牡鹿〕（卷六、九五三）
 棹_サ 棹牡鹿〔小牡鹿〕（卷八、一五四一）
 羊蹄_シ 君羊蹄八助動詞▽（卷一〇、一八五七）
 鹿_{シカ} 去鹿齒八助動詞▽（卷三、二八四）
 然_{シカ} 在然八助動詞▽（卷三、四四四）
 壯鹿_{シカ} 見壯鹿八助動詞▽（卷六、九〇八）
 然_{シカモ} 何然八助動詞▽（卷一三、三三二七）
 及_{シク} 敷及〔頻々〕（卷一一、二五五二）
 布_{シク} 打布裳〔頭〕（卷四、七七二）
 敷_{シク} 乏敷〔羨〕（卷六、九一三）
 死_{シニ} 莫死〔無＋助動詞〕（卷一一、二六七六）
 小竹_{シノ} 小竹櫃〔偲〕（卷一、六）
 小篠_{シノ} 小篠生〔偲〕（卷六、九四〇）
 染_{シミ} 目頰染〔珍＋接辭〕（卷二、一九六）

- 下_{シモ} 言下_ノ助詞_ノ (卷四、六四九)
 霜_{シモ} 故霜_ノ助詞_ノ (卷七、一三七九)
 白粉_{シラニ} 白粉_ノ「不知」 (卷一三、三二七六)
 胡粉_{シラニ} 胡粉_ノ「不知」 (卷一、二六七七)
 知_{シル} 知之_ノ「著」 (卷三、二五八)
 白_{シロ} 阿白木尔_ノ「網代木」 (卷三、二六四)
 渚_ス 忘渚菜_ノ助詞_ノ (卷一、二七六三)
 酢_ス 酢堅_ノ「姿」 (卷四、七七八)
 為_ス 為酢寸_ノ「薄」 (卷一〇、二二二二)
 簀_ス 通簀文_ノ助詞_ノ (卷一三、三二九五)
 鈴_{スズ} 鈴寸_ノ「鱸」 (卷一、二七四四)
 墨_{スミ} 真黒乃鏡_ノ「真澄鏡」 (卷一六、三八八五)
 摺_{スル} 摺香聞_ノ「為」 (卷四、六七五)
 脊_セ 有脊者_ノ助詞_ノ (卷六、九四八)
 瀬_セ 瀬子_ノ「背子」 (卷一、九)
 狹_{セ(シ)} 狹名盤_ノ「夫」 (卷一、二五二二)
 蟬_{セミ} 打蟬等_ノ「現身」 (卷二、一九九)
 責_{セム} 責_ノ「為_ノ助動詞」 (卷四、六三二)
- 十_ッ 須十二_ノ「裾」 (卷一、四〇)
 衣_ッ 衣寸_ノ「極」 (卷六、九七一)
 其_ソ 恋其_ノ助詞_ノ (卷四、六九五)
 背_ッ 我許背齒_ノ助詞_ノ (卷一、二)
 嫌_{ソネ(ム)} 对嫌_ノ助詞_ノ (卷七、一二七六)
 其_{ソノ} 其業_ノ「園」 (卷七、一三五七)
 苑_{ソ(ノ)} 死者木苑_ノ助詞_ノ (卷一六、三七九二)
 副_{ソフ} 名副_ノ「擬」 (卷一、二四六三)
 田_タ 田菜引物緒_ノ「繫繩」 (卷三、三二二)
 竜_{タツ} 立竜_ノ「立」 (卷一、二)
 立_{タツ} 庭立水_ノ「水潦」 (卷七、一三七〇)
 鶴_{タツ} 鶴寸乎_ノ「方便」 (卷一、五)
 棚_{タナ} 棚知_ノ「知」 (卷一三、三二七九)
 谷_{タニ} 明日谷_ノ助詞_ノ (卷二、一九八)
 玉_{タマ} 玉坂_ノ「偶」 (卷一、二三九六)
 絶_{タユ} 絶谷_ノ「寛」 (卷七、一三五二)
 足_{タル} 立儀足_ノ助詞_ノ (卷二、一五八)
 垂_{タル} 咲酢左乾垂_ノ助詞_ノ (卷一〇、二二八二)

千 チ 千羽日給而〔幸〕（卷九、一七五三）
 乳 チ 乳鳥〔千鳥〕（卷三、二六八）
 塵 チリ 塵家武〔散〕（卷二、一〇四）
 津 ツ 麻知兼津人助動詞（卷一、三〇）
 束 ツカ 名束敷〔懷〕（卷六、一〇五九）
 著 ツカシ 名著〔懷〕（卷七、一三〇五）
 附 ツク 四附二〔幸〕（卷二、一〇七）
 春 ツク 近春二家里〔近付〕（卷九、一七七五）
 盡 ツク 爪盡〔噴〕（卷二、二四二二）
 築 ツク 気築之〔息衝〕（卷二、三一一五）
 告 ツグ 謂告我称〔継〕（卷二、二八七三）
 乍 ツ、 石上乍自〔岩躑躅〕（卷二、一八五）
 筒 ツ、 雲隠筒人助詞（卷二〇、二二二八）
 管 ツ、 見管人助詞（卷一、一七）
 堤 ツ、メ 堤有〔裏〕（卷三、三一九）
 積 ツム 落名積〔泥〕（卷七、一一一六）
 列 ツラ 目列敷〔珍〕（卷六、一〇五九）
 頬 ツラ 目頬染〔珍〕（卷二、一九六）

鶴 ツル 相見鶴鳴人助動詞（卷一、八一）
 釣 ツル 言釣人助動詞（卷一三、三三三三）
 手 テ 宇多手〔憂〕（卷二、二四六四）
 而 テ 伊而麻左自常屋〔出〕（卷八、一四五二）
 光 テリ 待香光人助詞（卷三、三七〇）
 十 ト 将会十羽人助詞（卷一、二六〇一）
 戸 ト 忘戸人助詞（卷一、二五八〇）
 砥 ト 和須良牟砥人助詞（卷二〇、四三四四）
 迹 ト 過迹人助詞（卷六、一〇二三）
 当 ト 来及霧常人助詞（卷四、四九九）
 鳥 ト 海人鳥屋人助詞（卷七、一二三四）
 跡 ト 妹跡人助詞（卷三、四八一）
 礪 ト 礪津宮地人離宮地（卷一三、三三三二）
 時 トキ 時齒成〔常盤〕（卷七、一一三四）
 床 トコ 床奈馬尔〔常滑〕（卷九、一六九五）
 殿 トノ 殿雲流人接辞（卷三、三七〇）
 友 トモ 友師母〔羨〕（卷一、五五）
 共 ドモ 得見監乍共人助詞（卷二、一五六）
 〔トモ〕

伴 ドモ 摺目伴^ハ助詞^ヰ (卷七、一三三九)
〔↓トモ〕
 侶 トモ 不問侶^ハ助詞^ヰ (卷七、一二二一)
 柄 トモ 無柄^ハ助詞^ヰ (卷二、一三二一)
 十方 トモ 不座十方^ハ助詞^ヰ (卷二、一七二二)
 十 トヲ 十尾二^ハ〔撓〕 (卷八、一五九五)
 七 ナ 安良七国^ハ助動詞^ヰ (卷三、二六三三)
 名 ナ 結手名^ハ助詞^ヰ (卷一、一〇〇)
 菜 ナ 許芸乞菜^ハ助詞^ヰ (卷一、八)
 魚 ナ 魚津左比去者^ハ〔足沾〕 (卷四、五〇九)
 莫 ナ 莫津左比^ハ〔足沾〕 (卷六、一〇一六)
 中 ナカ 難波居中跡^ハ〔田舎〕 (卷三、三二二)
 半 ナ(カ) 半甘^ハ〔泣〕 (卷一六、三八四六)
 長 ナガ 神長柄^ハ〔隨神〕 (卷一、三八)
 鳴 ナク 白鳴^ハ助動詞^ヰ接辭^ヰ (卷二、一五八)
 薙 ナギ 夕薙丹^ハ〔夕風〕 (卷六、一〇六二)
〔↓ナグ〕
 梨 ナシ 梨^ハ〔無〕 (卷一一、二五二〇)
 成 ナス 衣尔着成^ハ接辭^ヰ (卷一、一九)

鳴 ナス 垣廬鳴^ハ接辭^ヰ (卷一一、二四〇五)
 夏 ナツ 良慍^ハ〔懷〕 (卷七、一一九五)
 苗 ナヘ 響苗尔^ハ助詞^ヰ (卷七、一〇八八)
 波 ナミ 波累服^ハ〔並〕 (卷一六、三七九二)
 浪 ナミ 石波^ハ〔石並〕 (卷二、一九六)
 嘗 ナム 染嘗^ハ助動詞^ヰ (卷三、三四三三)
 雙 ナミ 有雙^ハ〔否〕 (卷一三、三三〇〇)
〔↓ナム〕
 櫓 ナラ 嶋櫓名君^ハ助動詞^ヰ (卷一二、三一六六)
 生 ナル 香青生^ハ助動詞^ヰ (卷三、一三二一)
 成 ナル 常磐成^ハ助動詞^ヰ (卷三、三〇八)
 業 ナル 其業^ハ助動詞^ヰ (卷七、一三五七)
 鳴 ナル 水手鳴^ハ助動詞^ヰ (卷七、一一四三)
 土 ニ 白土^ハ助動詞^ヰ (卷一、五)
 丹 ニ 常丹毛翼名^ハ助詞^ヰ (卷一、二二二)
 荷 ニ 弥益荷^ハ助詞^ヰ (卷四、六一七)
 西 ニシ 立西日從^ハ助動詞^ヰ (卷三、四四三)
 庭 ニハ 其日左右庭^ハ助動詞^ヰ (卷九、一七五二)
 似 ニ 世染似裳^ハ助詞^ヰ (卷一一、二七二七)
〔↓ニル〕

煎^ニ 思煎石^ハ助動詞^ヰ (卷六、一〇四七)
 煮^ニ 常処女煮手^ハ助動詞^ヰ (卷一、二二)
 沼^ヌ 常有沼鴨^ハ助動詞^ヰ (卷六、九二二)
 宿^ヌ 有与宿鴨^ハ助動詞^ヰ (卷四、五四六)
 寐^ヌ 有寐鹿^ハ助動詞^ヰ (卷一〇、二〇七〇)
 梗^{ヌカ} 有梗^ハ助動詞^ヰ + 助詞^ヰ (卷四、七二八)
 額^{ヌカ} 吹額^ハ助動詞^ヰ + 助詞^ヰ (卷七、一二二三)
 塗^{ヌレ} 成塗^ハ助動詞^ヰ (卷二、一六七)
 根^ネ 告紗根^ハ助動詞^ヰ (卷一、一)
 笑^ノ 石床笑^ハ助動詞^ヰ (卷一三、三二七四)
 野^ノ 小竹尔^ハ (卷一〇、一九七七)
 筧^ノ 筧跡丹^ハ (卷一三、三三三九)
 鑿^{ノミ} 各鑿杜^ハ助動詞^ヰ (卷一三、三二九八)
 法^{ノリ} 繩法之^ハ (繩苔) (卷一三、三三〇二)
 乘^{ノリ} 名乘曾花^ハ (名告藻花) (卷七、一二九〇)
 羽^ハ 伊去羽斤^ハ (憚) (卷三、三二二)
 者^ハ 者田為々寸^ハ (旗薄) (卷一六、三八〇〇)

葉^ハ 今葉^ハ助動詞^ヰ (卷四、六九五)
 齒^ハ 言齒^ハ助動詞^ヰ (四、六七四)
 墓^{ハカ} 思墓^ハ助動詞^ヰ (卷四、五四〇)
 斤^{ハカリ} 伊去羽斤^ハ (憚) (卷三、三二二)
 計^{ハカル} 射去羽計^ハ (憚) (卷二、三〇六九)
 吐^{ハキ} 牛吐賜^ハ (領) (卷六、一〇二〇)
 掃^{ハク} 牛掃神之^ハ (掃) (卷九、一七五九)
 端^{ハシ} 端尔^ハ (間) (卷二、一九九)
 椅^{ハシ} 思足椅^ハ (足 + 接辭) (卷一三、三二五八)
 橋^{ハシ} 何時橋物^ハ助動詞^ヰ (卷一三、三三二九)
 秦^{ハタ} 秦^ハ (肌) (卷一、二三九九)
 旗^{ハタ} 垣津旗^ハ (杜若) (卷一〇、一九八六)
 幡^{ハタ} 垣津幡鸞^ハ (杜若) (卷七、一三四五)
 廿^{ハタ} 廿物^ハ (機物) (卷七、一二九八)
 皮^{ハダ} 皮為酢寸^ハ (旗薄) (卷三、三〇七)
 翼^{ハネ} 翼酢色乃^ハ (朱華色) (卷一、二七八六)
 蠅^{ハヘ} 蠅師^ハ (延) (卷四、六六二)
 食^{ハム} 寸食^ハ (極) (卷四、四八五)

生 ハユ 小篠生〔偲+助動詞〕(卷六、九四〇)
 原 ハラ 棘原〔荊〕(卷一六、三八三三)
 日 ヒ 多日夜取世須〔旅宿〕(卷一、四五)
 火 ヒ 丹杵火尔之〔柔〕(卷三、四八一)
 氷 ヒ 氷津裏丹〔純裏〕(卷一六、三七九二)
 引 ヒク 名引秋風〔靡〕(卷一〇、二〇九六)
 延 ヒク 名延之〔靡〕(卷二、二〇七)
 櫃 ヒツ 小竹櫃〔偲+助動詞〕(卷一、六)
 純 ヒト 百船純毛〔百船人〕(卷六、一〇二三)
 早 ヒ 五十羽早〔齋〕(卷一三、三二九一)
 乾 ヒ 咲醉左乾垂〔遊〕(卷一〇、二二八二)
 經 フ 不知代経浪乃〔猶予〕(卷三、二六四)
 歴 フ 伊佐夜歴雲者〔猶予〕(卷三、四二八)
 振 フク 汗湍能振〔吹〕(卷一三、三二二一)
 古 フル 立神古ハ接辞〔(卷一二、二八六三)
 触 フレ 裏触立〔心勞〕(卷七、一一一九)
 戸 ヘ 所念奈戸二ハ助詞〔(卷一、五〇)

重 ヘ 得羽重無〔上辺〕(卷四、六九二)
 蛇 ヘミ 落過沼蛇ハ助動詞〔(卷一〇、二二九〇)
 穂 ホ 其穂船乃〔緒舟〕(卷一〇、二〇八九)
 欲 ホシ 大欲寸〔鬱悒〕(卷一六、三七九四)
 欲 ホリ 田本欲〔廻〕(卷七、一二四三)
 眞 マ 引乃真尔真荷〔隨〕(卷六、一〇四七)
 鬼 マ 八鬼目〔止〕(卷一三、三二五〇)
 間 マ 間幸座与〔真幸〕(卷三、四四三)
 卷 マク 掛卷母ハ助動詞+接辞〔(卷三、四七五)
 纏 マク 掛纏母ハ助動詞+接辞〔(卷一三、三三三四)
 任 マケ 夕方任〔設〕(卷一一、二二七三)
 申 マシ 借申尾ハ助動詞〔(卷九、一七四三)
 猿 マシ 有猿尾ハ助動詞〔(卷二、九一)
 舛 マス 伊夜益舛二〔益〕(卷一三、三二四三)
 益 マシ 成益物乎ハ助動詞〔(卷二、一〇八)
 増 マシ 与良増ハ助動詞〔(卷七、一一三七)
 舞 マヒ 竊舞師〔盜+接辞〕(卷一一、二八三二)

- 三ミ 三輪〔神酒〕（卷二、二〇二）
 水ミ 水空〔御空〕（卷四、五三四）
 御ミ 高御香裳〔接辭〕（卷六、九八〇）
 箕ミ 浦箕乎〔浦廻〕（卷四、五〇九）
 三ミツ 三礼二〔羸〕（卷四、七一九）
 見ミ 痛見〔接辭〕（卷一、五）
 視ミ 驚視〔接辭〕（卷九、一七六一）
 六ム 布麻須等六〔助動詞〕（卷一、四）
 女メ 安夜女具佐〔菖蒲草〕（卷一八、四一〇一）
 目メ 告目〔助動詞〕（卷一、一）
 眼メ 止眼〔助動詞〕（卷四、六七八）
 海藻メ 何如荒海藻〔助動詞〕（卷四、六五九）
 食メス 所知食登〔補助動詞〕（卷二、一六七）
 方モ 宮舍人方〔助動詞〕（卷一三、三三二四）
 喪モ 悲喪〔助動詞〕（卷三、四五九）
 裳モ 家裳〔助動詞〕（卷三、二六五）
 藻モ 忘可祢津藻〔助動詞〕（卷一、七二）
 本モト 田本欲〔廻〕（卷七、一二四三）
- 物モ（ノ） 何時橋物〔助動詞〕（卷一三、三三三九）
 溢モル 名草溢〔慰〕（卷一、二五七二）
 漏モル 名草漏〔慰〕（卷四、五〇九）
 諸モロ 三諸乃〔杜〕（卷三、三三四）
 八ヤ 忘目八〔助動詞〕（卷二、一一〇）
 矢ヤ 射矢〔弥〕（卷二〇、二二二八）
 屋ヤ 相屋常〔助動詞〕（卷二、一九四）
 山ヤマ 山目〔止〕（卷二、二八八三）
 病ヤマ 不病〔止〕（卷七、一四〇五）
 八方ヤモ 敷而耳八方〔助動詞〕（卷二、二五九六）
 湯ユ 湯目〔努〕（卷四、六六〇）
 世ヨ 見世常〔助動詞〕（卷六、九七二）
 代ヨ 不知代経〔猶予〕（卷三、二六四）
 四ヨ 四来〔好〕（卷一、二七）
 夜ヨ 伊佐夜歴〔猶予〕（卷三、四二八）
 呼ヨ（フ） 常呼二跡〔常世〕（卷四、七二三）
 等ラ 定異等霜〔助動詞〕（卷六、一〇五一）
 輪ワ 三輪〔神酒〕（卷二、二〇二）

- 綿 ワタ 鳴綿類〔鳴渡〕(卷一〇、一九七七)
- 井 キ 田居尔〔田居〕(卷九、一七五八)
- 居 キ 難波居中跡〔田舎〕(卷三、三二二)
- 座 キ 跡座浪之〔腫浪〕(卷一三、三三三五)
- 画 エ 縦画屋師ハ感動詞(卷二、一三一)
- 咲 エ(ム) 吉咲八師ハ感動詞(卷二、一三八)
- 男 ヲ 片念男ハ助詞(卷四、七一九)
- 尾 ヲ 有猿尾ハ助詞(卷二、九二)
- 麻 ヲ 磯麻ハ助詞(卷九、一七九六)
- 雄 ヲ 八万雄ハ助詞(卷二、一七)
- 緒 ヲ 田菜引物緒ハ助詞(卷三、三二一)
- 鴛 ヲシ 手鴛ハ助詞(卷七、一二五九)
- 鴛 ヲシ 鴛視〔惜〕(卷九、一七六一)
- 鴛鴦 ヲシ 辞鴛鴦ハ助詞(卷一一、二七五五)
- 食 ヲシ 妹食序ハ助詞(卷一二、三二一九)
- 折 ヲリ 峯之手折丹〔嶼〕(卷一三、三二七八)
- 〔↓ヲス〕
- △参考資料1 枕詞の眞仮名表記
- 悪 アシ 惡氷木乃(卷一一、二七〇四)

- 芦 アシ 芦檜木笑(卷九、一八〇六)
- 磯 イ(シ) 百磯城之(卷一、二九)
- 磐 (イ)ハ 千磐破(卷二、一九九)
- 城 キ 百磯城之(卷一、二九)
- 次 スキ 珠手次(卷一、五)
- 楯 タテ 増楯(卷一六、三八七八)
- 血 チ 血速旧(卷一三、三二三六)
- 常 ツネ 足常(卷一一、二四九五)
- 級 ハシ 級子八師(卷一一、二六七八)
- 春 ハル 玉尅春(卷一、四)
- 檜 ヒ 足檜木乃(卷三、四七七)
- 振 フル 千早振(卷一一、二四一六)
- 旧 フル 血速旧(卷一三、三二三六)
- 破 ヤブル 千磐破(卷二、一九九)

※枕詞には語義不明のものが多く、原則として、漢字の定訓を抽出するための確実な資料とはなし難い。但し、右は、借字表記に従ったかと思われる事例なので、先に語形の抽出を行ない得なかったものを参考までに掲出したのである。

△参考資料2 固有名詞の真仮名表記▽

出 イツ 出見川 (巻九、一六九五)

畝 ウネ 畝火之山 (巻一、二九)

奥 オキ 奥十山 (巻一三、三二四二)

前 サキ 武良前野 (巻一、二〇)

迫 セ(ム) 師齒迫山 (巻一一、二六九六)

又 マタ 又打山 (巻六、一〇一九)

※固有名についても、その語源を軽々に認定することができないので、右も参考までに掲げるに過ぎないが、若しそれらが借字表記に供されたものであるならば、右の諸漢字は、その定訓を抽出し得たことになろう。

△参考資料3 固有名詞の同語異表記▽

犬 (イ)ヌ 三犬女乃浦 (巻六、九四六) 見宿女乃浦 (六、一〇六六)

滓 カス 滓鹿能山 (二〇、一八四四) 借香能山 (巻一〇、二一九九)

児 コ 射等籠荷四間 (巻一、二三) 五十等児乃島辺 (巻一、四二)

品 シナ・科 シナ 山品 (巻九、一三七〇) 山科 (巻九、一七三二)

荷 ノ ↓児 コ

※固有名の漢字表記であっても、同語異表記の事例で、しかも、それが借字表記でもある場合、定訓と見るべき和訓を抽出することが尚可能のようである。右は、その事例となろう。

〔備考〕

かように、借字表記の事例を通して、当代における漢字の定訓をかなりの数抽出し得ると思われるのであるが、それにしても、かかる手続きで抽出できる定訓は、その数が限られている。しかして、右の他に、一々の漢字についてかかる定訓を確認し、その語形を再現すべき方法は尚考え得ないのであるが、次の如き推定は行ない得るかと思われる。即ち、例えば、季節に関わる漢字彙で、前掲の如く、「春」「夏」「秋」については、借字表記からその定訓を抽出し得た。これら漢字に定訓が存するとすれば、

。毛許呂婆遠春冬、片設而幸之字陀乃大野者所念武鴨 (巻第二、一九二)

などの「冬」字にも定訓が存したと想定するのが自然であろうと思われるのである。しかも、中世にまで降っても、右の三字の和訓は諸字書に、

。春 齒均反 ハル (観智院本類聚名義抄、仏中八六)

春 ハル 四時之首也 (三卷本色葉字類抄、波・天象)

春 シン：ハル (白河本字鏡集一、天象・日)

。夏： 音下大、中国名 (観智院本類聚名義抄、僧中五二)

夏 オホキナリ (三卷本色葉字類抄、那・天象) *二卷本では和訓ナツが片仮名

表記されている。

馬カ 次夏之時也 (寛元本字鏡集卷第六、二)

夏 地名也ナツ オホキナリ (観智院本類聚名義抄、法下一三)

。秋 七由反 アキ (観智院本類聚名義抄、法下一三)

秋 トキ 和シウ アキ：シヤウ 同 商式羊反 (三卷本色葉字類抄、阿・天象)

秋^{シキ}…アキ（白河本字鏡集七、植物下・禾）
トキ

などと登録されており、一方で和訓オホキナリが「大」字、和訓トキが「時」字に定着していることを考慮すると、

。大^{オホキナリ}…達^{オホキニ}已上代（黒川家蔵三卷本色葉字類抄、於・辞字）

。時^{トキ}…堯^{トキ}已上同（三卷本色葉字類抄、度・天象）

「春」字に和訓ハルが、「夏」字に和訓ナツが、「秋」字に和訓アキが上代以来変らず定訓として定着していたものと推定される。とする
と、「冬」字についても、中世において尚、

。冬^{フユ}…都農反（観智院本類聚名義抄、法上四五）

冬^{フユ}…都（黒川家蔵三卷本色葉字類抄、布、天象）

冬^{トウ}…フユ（寛元本字鏡集卷第一、天象・二水）

など、和訓としてフユ一訓を得るに過ぎないところより推して、元来これが定訓と認むべきものであったのであろう。又同様に、身体関係の漢字彙について、「足」「手」「目」にそれぞれ定訓が得られた。これらの漢字に和訓の固定が見られるとすると、同類の他の漢字、例えば、

。口^ク不息吾恋兒矣玉釧手取持而真十鏡直目尔不視者、（万葉集卷第九、一七九二）

。之尔夫可比鼻毗之毗之尔、（万葉集卷第五、八九二）

。如眉雲居叵所見阿波乃山懸而榜舟泊不知毛、（万葉集卷第六、九九八）

。耳^{ミミ}爾聞眼尔視其等尔宇知嘆之奈要宇良夫礼之努比都追有来波之尔、（万葉集卷第十九、四一六六）

。許已念者胸許曾痛、（万葉集卷第八、一六二九）

など、傍点の諸漢字にも定訓の存する蓋然性は極めて高いものと思われる。しかし、それらの定訓は、それら漢字表記語の句中における音節数、又各漢字について、

。口^ク苦厚反^ククチ（観智院本類聚名義抄、仏中二六）

。鼻^{ハナ}頻寐反^{ハナ}ハシメツラヌク^{ハナ}鼻^{ハナ}（観智院本類聚名義抄、仏中二六）

。眉^{マユ}音靡^{マユ}マユ（観智院本類聚名義抄、仏中七六）

。耳^{ミミ}如始反^{ミミ}ミ、キクハタミ、ツカラ（観智院本類聚名義抄、仏中二）

。胸^{ムネ}胷^{ムネ}谷^{ムネ}ムネ（観智院本類聚名義抄、仏中二六）

など、後代の字書における和訓の登録状況より推して、「口」字に和訓クチ、「鼻」字に和訓ハナ、「耳」字に和訓ミミ、「胸」字に和訓ムネがそれぞれ定着していたと見られるのである。かように、漢字彙の意味領域毎に、定訓の確認された漢字を整理し、それらとの関連で他の諸漢字の定訓の存在とその語形とを類推することもできようかと思ふのである。

かくの如く、和語の漢字表記に関して、同語異表記・借字表記（いずれも字訓に基づく）の表記例を通して、当代における漢字の和訓を抽出し得るかと思われるのであるが、尚一方で、殊に同語異表記例については、そのような和訓を介さずに、語義と字義との同義性を利用して、表記されるべき語の語義とその表記に供される漢字の字義とを直接関

連させて漢字表記を行なったものも存するかと見られるので、それらから得られる和訓の取り扱いには、充分慎重を要するものと思われる。

二 上代における常用の漢字

あ 足⁹ (足ト…)
あき 秋²⁵² 8* (秋⁸⁹ 2* 秋時…) 金⁷ (金³ 金風…) 白² (白風…) 冷²
(冷風…)
あさ 朝¹⁶² (朝²² 朝宿…) 旦³² (旦³ 旦霞…) 明¹ (明¹)
あし 足⁸¹ 1* (足⁶ 足受利…)
あな 穴¹ (穴¹)
あふ 相³⁹² (相²⁹³ 相靜競… 三相…) 会¹⁴ (会¹³ 依会) 逢¹⁴ (逢¹³ 依
会) 合¹² (合¹¹ 立合) 遇⁶ (遇⁶ 遭³ 遭³ 交¹ 交¹)
ある 荒¹⁸ (荒¹⁸)
あゐ 藍⁴ (幹藍…)
いく 生³⁷ (生³⁷)
いし 石⁹ (石⁵ 石ト… 小石)
いた 板⁶ (板戸… 神依板)
いた (し) 痛²⁵ (痛²⁵ 哀² 哀²)
いち 市⁶ 1* (阿倍乃市道…)
いつ 五⁴ (五¹ 五箇年…)
いづみ 泉¹ (沢泉)
いぬ 去²⁰ (去²⁰) 行² (行²) 往³ (往³)

いね 稻² 1* (稻² 1*)
いは 石⁶⁷ 1* (石¹¹ 石垣沼間…) 磐¹⁶ (磐³ 磐垣淵…) 巖² (巖²)
いひ 飯⁶ (飯⁴ 味飯…)
いふ 云¹⁶⁶ 183* (云¹⁶⁶ 183*) 言⁷⁴ (言⁷⁴) 曰²³ 16* (曰²³ 16*) 謂⁴ (謂⁴) 要²
(要²) 僞¹ (僞¹) 語¹ (語¹) 謂言 (謂言¹)
いへ 家¹²⁷ 22* (家¹⁰⁷ 家路… 大伴坂上家之太娘…) 宅⁶ (宅⁶) 屋¹
(屋¹)
いほ 廬¹² (廬² 借廬)
いほ 五百¹⁹ (五百枝…)
いる 入³³ (入³² 随入) 納¹ (納¹)
いる 射⁴ (射³ 射和多之)
う 得¹⁶ (得¹⁶)
うく 受³ (受³)
うし 牛³ (牛¹ 事負乃牛之…)
うつ 打⁷⁴ (打¹⁰ 打掛…) 掾³ (掾手折) 格² (格¹ 格折) 敲¹ (敲
自努比) 擊¹ (擊越)
うら 占⁷ (占² 占問… 足占…) ト⁶ (ト¹ ト部 足ト…)
うら 浦⁸⁸ 13* (浦¹² 明石之浦…) 汭⁶ (汭渚… 貞能汭…) 灣² (田祐
灣…)
うら 裏⁹ (裏悲…) 末³ (末葉…)

え 江₄₉ (伊里江…)

おす 押₁₇ (押₁ 押垂小野…)
臨₃ (臨照…)

おふ 負₂₁ (負₁₉ 取負)

おほ 大₂₀₈ 122* (大綾…)

おほし 多₆₀ (多₁₀)

おほふ 覆₇ (覆₇)

おもふ 思₁₈₇ 19* (思₁₃₂ 19* 思贖… 片思…)
念₄₅₂ (念₃₉₉ 念堪… 片念…)

意₇ (意₇) 憶₅ (憶₄ 憶病)
想₃ (想₃)

か 日₁₂ (幾日…)

か 香₃ (香₃)

か 鹿₄ (鹿₄)

か 歟₁₆ (助動詞₃ 係助詞₁₃)

が 之₄₄₇ (連体格助詞₂₆₉ 主格助詞₁₇₈)

かき 垣₃₃ (垣₂ 芦垣… 垣内…)

かく 欠₂ 2* (欠₂ 2* 鼻₂ (鼻₂))

かしく 炊₁ (炊₁)

かす 借₇ (借₇)

かた 方₃₀ (方₈ 日方…)

かた 形₇ (形₁ 面形…)

かた 肩₅ (肩₅)

かた 堅₁ (堅塩)

かたし 堅₁ (堅₁)

かに 蟹₁* (蟹₁*)

かは 川₁₀₇ 2* (川₂₂ 1* 川上… 秋津乃川…)

芦木乃河…

かめ 亀₂ 1* (亀₂ 1*)

かも 鴨₁₈ 1* (鴨₁₄ 1* 鴨自物… 芦鴨)

から (し) 辛₂ (辛₂)

かり 雁₅₇ 3* (雁₂₄ 3* 雁使… 始雁…)

かる 刈₇₂ (刈₆₅ 芦刈…)
刈₁₄ (刈₁₃ 芦薦刈…)

かる 借₃ (借₃)

かる 涸₁ (涸₁)

き 木₇₄ 5* (木₁₀ 2* 阿白木…)
樹₁₈ 1* (樹₅ 梅樹…)
材₂ (船材…)

きも 肝₆ (肝向…)

きる 伐₄ (伐₄) 斬 (斬₁) 鑽₁ (鑽₁)

く 来₅₃₀ (来₅₀₃ 来生… 到来…)

くさ 草₁₆₁ 9* (草₃₁ 6* 草陰之… 秋草…)
沙₁ (浮沙) 三枝₂ (三枝₂)

くし 串₁ (五十串)

くに 国₁₆₄ 128* (国₆₈ 国方… 伊与国守…)
土₂ (山跡之土…)
州₁ (豊州)

邦₁ (邦₁) 本郷₁ (本郷)

くも 雲¹⁶⁷* (雲⁵⁰* 雲隠… 旦雲…)
 くら 倉² (倉²)
 くる 晩⁷ (晩⁷) 暮² (暮²) 闇² (闇²) 昏¹ (昏¹)
 け 毛⁵ (毛¹ 毛許呂毛…)
 け 食⁹ (大御食…)
 け 異⁴ (異⁴)
 こ 子²⁸¹* (子⁶³* 子生… 網子…) ※太子²* 皇子²⁴ 皇太子⁶⁵* 皇太子²*
 児¹⁶²* (児⁷⁹* 年魚児…)
 こ 木⁶⁰ (木高… 樹³ (樹立…))
 こ 籠¹ (籠¹ 美籠)
 こと 事⁷⁶ (事⁷⁵ 何事)
 こと 殊¹ (殊¹) 殊異¹ (殊異¹)
 こと 琴⁴* (琴²* 琴引… 彈琴…)
 こる 凝³ (凝¹ 味凝…)
 さか 坂¹³* (坂² 足柄坂…)
 さけ 酒²⁷* (酒¹⁴* 酒杯… 味酒…) ※造酒²
 さね 信¹ (信¹) 核¹ (核¹)
 さは 沢⁵* (沢² 沢蘭… 山沢回具)
 さふ 塞² (塞¹ 立塞) 禁¹ (禁¹) 障¹ (障¹)
 さむ (し) 寒⁴⁹ (寒⁴⁸ 寒水) 冷¹ (冷¹)

さる 去⁸⁴ (去⁸⁰ 秋去衣…) 避⁴ (避⁴) 離⁴ (離⁴)
 さを 棹³ (棹² 小棹) 竿² (竿²)
 しか 鹿⁴⁵ (鹿¹² 左小鹿…)
 しか 然¹⁷ (然¹⁴ 然有)
 しく 及⁵ (及⁵) 如⁴ (如⁴) 若¹ (若¹)
 しく 敷³⁸ (敷¹¹ 敷多倍乃… 片敷) 布⁸ (布³ 布妙之…)
 しぬ 死⁷¹ (死⁷¹) 終¹ (終¹) 所殺¹ (所殺¹)
 しの 小竹⁶ (小竹⁴ 浅小竹原…) 細竹³ (細竹¹ 細竹為酢寸…)
 しむ 染¹¹ (染¹¹)
 しも 下⁷* (下³* 下瀬… 足下郡…)
 しも 霜⁷* (霜²⁶* 霜干… 朝霜之…)
 しる 知²⁰⁹ (知²⁰⁵ 田菜知…)
 しろ (し) 白⁶⁹ (白⁵ 白麻衣… 真白)
 す 渚⁷ (渚³ 渚渚…)
 す 酢¹ (酢¹)
 す 為³⁷⁹ (為³⁷⁹) 作¹ (作¹)
 すず 鈴³ (鈴¹ 小鈴)
 すみ 墨³ (墨³ 墨繩…)
 する 摺¹⁰ (摺⁸ 摺衣…)
 せ (し) 迫¹ (迫¹)

せ 瀬 93 (瀬 49 瀬瀬 石瀬…) 湍 29 (湍 10 湍瀬 河湍…)
 せみ 蟬 11* (蟬 11*)
 せむ 責 2 (責 2)
 そ 十 37 (八十…)
 そ 其 6 (其 6) 彼 1 (彼 1)
 その 其 71 (其 71) 彼 11 (彼 11)
 その 苑 6 (苑 6) 苑 1 (苑 1) 園 1 (園 1)
 そふ 副 9 (副 7 河副…) 傍 1 (傍 1)
 た 田 73* (田 21 田草… 班田…)
 た 立 342 (立 264 立合… 朝立…) 起 5 (起 5) 発 4 (発 4) 颯 1 (颯 1)
 た 鶴 23 1* (鶴 19 1* 鶴群 芦鶴…) 鵠 1 (鵠 1)
 たな 棚 6 (棚無小舟…)
 たに 谷 6 (谷 2 谷潜…) 谿 3 (谿 1 谿敵…) 溪 2 (溪 2 涉溪)
 たま 玉 334 5* (玉 57 3* 玉江… 足玉…) 珠 63 (珠 20 珠蜻… 鰈珠…)
 璞 1 (荒璞能)
 たゆ 絶 64 (絶 62 緒絶) 断 3 (断 3) 止 1 (中止) 怠 1 (無怠)
 たる 足 20 (足 11 足夜… 木足…)
 たる 垂 19 (垂 11 垂尾… 蚊寸垂…)
 ち 千 86 2* (千 遍…)
 ち 乳 12 (乳 1 垂乳為…)

つ 津 15 1* (津 4 津守… 櫟津…)
 つか 束 7 (束之間… 手束弓…)
 つく 付 44 (付 8 秋付…) 著 20 (著 12 摺著…) 附 18 (附 4 秋附…)
 就 10 (就 2 秋就…) 認 1 (認 1)
 つく 春 1 (春 1)
 つく 尽 6 (尽 6) 遍 2 (遍 2)
 つぐ 告 40 (告 40)
 つつ 乍 198 (乍 198) 而 2 (而 2)
 つつみ 堤 5 (堤 4 埴安乃堤)
 つむ 積 9 (積 4 刈積…)
 つる 鶴 1* (鶴 1*)
 つる 釣 17 1* (釣 11 釣船) 鉤 3 (鉤 2 鉤船)
 て 手 129 1* (手 72 手児… 網手綱…)
 て 而 1194
 てる 照 57 (照 38 照出… 天照…) 光 11 (光 7 天光…) 曜 1 (曜 1)
 と 戸 16 (戸 6 朝戸…) 扉 1 (朝扉)
 と 跡 2 (跡陰…)
 と 鳥 4 (鳥 獵…) 鷹 2 (鷹 田 始鷹獵)
 と 時 205 1* (時 180 時敷… 旭時…)
 と 床 23 (床 12 朝床…)

との 殿¹²3* (殿² 殿隱… 大殿…)
とも 友¹³ (友¹² 友鷹) 共¹¹ (共¹¹) 伴³ (伴¹ 伴部…)
とも 軀¹ (軀¹) 徒¹ (徒¹)
な 名¹¹⁹ (名¹⁰⁰ 名細之… 五百名…)
な 菜⁹ (菜¹ 朝菜…)
な 莫⁹⁴ (莫⁹⁴) 勿⁵¹ (勿⁵¹) 嫌¹ (嫌¹)
なか 中⁶⁴18* (中¹⁵ 中言… 里中…)
なが 長¹⁴ (長² 長雨…)
なく 鳴²⁶¹ (鳴²³⁹ 鳥之鳴… 鶉鳴…)
哭¹ (哭¹) 啼¹ (啼¹)
なし 梨¹* (梨¹*)
なす 成⁹ (成⁸ 見成) 為¹ (為¹) ※所為¹ 作¹ (作¹)
なす 鳴¹ (鳴¹)
なつ 夏³⁴ (夏¹⁰ 夏影…)
なへ 苗² (苗²)
なみ 浪¹⁹⁴ (浪⁷⁰ 浪雲乃… 荒浪…)
なむ 並¹⁴ (並⁹ 刺並之…) 雙⁵ (雙¹ 有雙…)
なら 櫟^柴 (櫟^柴1)
なる 成¹⁰¹ (成¹⁰¹) 至² (至²) 業² (業²) ※産業¹ 生¹ (生¹)

作¹ (作¹) 為¹ (為¹)
なる 鳴⁶ (鳴² 鳴神…)
に 丹¹⁶ (丹管士… 左丹…)
に 荷³ (荷¹ 表荷…)
にし 西²3* (西¹ 西池辺…)
には 庭²¹ (庭¹⁸ 庭草… 暮庭)
にる 似¹³ (似¹³)
にる 煮² (煮²)
ぬ 沼⁸ (隱沼…)
ぬ 宿¹¹² (宿⁹⁰ 浮宿…)
丸寝⁵ (眠⁴ 紗眠) 睡⁵ (睡⁵)
ぬか 額⁴ (額¹ 額髮…)
ぬる 塗⁴ (佐丹塗…)
ね 根⁷⁷ (根⁵ 根蔓… 赤根指…)
の 野²⁵⁶13* (野⁵⁸ 野遊 蜻野…)
のり 法¹ (御法)
のる 乘²⁹ (乘²¹ 直乘…)
は 羽¹⁵ (羽² 羽音… 秋津羽…)
は 者¹³³³ (者¹³³³)
は 葉⁹⁹2* (葉⁸1* 安之能葉…)

- はか 墓³4* (墓¹ 菟原処女墓…) 冢¹ (冢¹)
- はかる 計⁴ (事計) 量¹ (言量)
- はく 掃² (可古掃)
- はし 端¹ (端¹)
- はし 椅¹ (石椅)
- はし 橋²³ (天橋…)
- はた 秦¹¹ (秦伊美吉石竹…)
- はた 旗⁵ (旗須為寸… 青旗乃…) 幡³ (幡¹ 幡 幡 青幡之)
- はだ 皮³ (皮¹ 皮為酢寸) 肌¹ (肌¹) 膚¹ (柔膚)
- はね 翼³ (翼² 翼霧)
- はへ 蠅² (五月蠅奈周…)
- はむ 喫⁵ (喫⁴ 毛利喫) 昨¹ (昨¹) 食¹ (食¹)
- はら 原¹³⁴8* (原¹ 阿後尾之原…)
- ひ 日²⁹⁵ (日¹⁵⁷ 日方… 朝月日…) ※一日…180 朝鳥¹ 蛭蟬¹*
- ひ 火²⁹ (火¹⁵ 葦火¹…)
- ひ 氷³ (氷² 氷魚)
- ひく 引⁸⁸ (引³² 引帶… 足引乃…) 曳² (足曳之…) 延² (延¹)
- 須蘇延¹ 挽¹ (挽¹) 疾¹ (足疾乃) 病¹ (足病之) 痛¹ (足痛)
- ひつ 櫃¹ (櫃¹)
- ふ 干²⁸ (干¹³ 塩干…) 乾⁵ (乾⁵)
- ふ 経⁶⁰ (経⁵⁹ 寸経) ※経過¹ 歴¹² (歴¹²)
- ふる 古¹ (古⁸) (古¹³2* (古² 古枝¹…) 故¹ (故⁴)
- 4) (形¹) (故² 故郷) 旧¹ (旧³) (形¹) (旧³ 旧
- 江)
- ふる 触²⁰ (触¹⁹ 打触) ※所触¹
- へ 重⁵⁴ (五百重…)
- ほ 穂³⁴ (穂¹⁵ 穂田… 稻穂…)
- ほし 欲³¹ (欲²⁷ 見我欲…)
- ほる 欲⁴⁰ (欲³⁸ 見我欲…) ※欲焉²
- ま 真¹²⁰ (真浦悲…)
- ま 間¹⁰⁶ (間⁵⁵ 間近… 雨間…) 際¹⁸ (際¹⁵ 木際) 暇¹ (暇¹)
- まく 卷³⁶ (卷³⁵ 伊卷) 纏³² (纏²⁵ 逆纏…) 枕⁷ (枕⁷)
- まく 任² (任²) 遣¹ (遣¹)
- ます 益²⁰ (益¹³ 弥益二…)
- まひ 舞¹1* (歌舞所…)
- み 三⁶ (三日月…)
- み 水⁴⁸ (水鴨成… 垂水…)
- み 御¹⁴⁴10* (御羹汁…)
- みつ 三⁴ (三¹ 三相…) ※三箇¹
- みる 見⁶⁷⁵ (見⁵⁸² 見可久思… 出見浜…) 視⁷1* (視⁶ 視送…) 看³
- (看² 国看) 望¹ (望国) 監¹ (監¹) 対面¹ 御覧¹

むつ 六1 (六1) ※六箇1
 め 女1 361* (女3 女餓鬼1… 大宅女…) ※郎女1 72* 女郎41* 采女8*
 婿女1 1* 女婦7* 未通女21 処女14 4* 娘子2* 丁女1 童女1
 め 目92 (目46 目言… 網目…) 眼10 (眼3 眼並… 人眼…)
 め 海藻3 (海藻刈舟 和海藻…)
 めす 食13 (食2 所念食…) ※御食1 召13 (召13) 見11 (見10 所聞見
 為) ※御見1 御1 (一1) 喚1 (喚1)
 も 方6 (四方)
 も 裳26 (裳9 裳引 赤裳…) 裾1 (玉裾1)
 も 藻72 1* (藻1 1* 藻刈舟… 息津藻…)
 もと 本21 1* (本12 本葉… 磯本…)
 もの 物238 7* (物214 7* 物語… 煮物…) 鬼11 (鬼11)
 もろ 漏1 (漏1)
 もろ 諸7 (諸茅等…)
 や 八79 (八占刺…)
 や 矢9 (矢2 矢形尾 得物矢…) ※弓矢1 箭3 (箭1 於比曾箭…)
 や 屋32 2* (屋3 屋形… 芦屋…)
 やま 山71 35* (山192 3* 山藍… 秋山…)
 やむ 病2 3* (病2 2* 鬼病) 痛1 (痛1)
 ゆ 湯5 2* (湯3 石湯行宮…) ※温泉3 5* 温湯1 1*

よ 代89 (代15 代人3 新代…) 世83 (世8 世中… 新世…) 生3
 (今生…) 齒1 (齒1)
 よ 四7 1* (四千…)
 よ 夜287 (夜135 夜鳥… 曉月夜…) 宵5 (宵1 宵霧隱 佐宵中…)
 夕3 (夕1 七夕…)
 よつ 四3 2* (四1 四船 從四位下)
 よぶ 呼20 (呼18 呼立) 喚19 (喚16 喚立) 召3 (召3) 唱1 (唱
 立)
 ら 等88 5*
 わ 輪2 (面輪)
 わた 綿3 1* (綿2 1* 絶綿良)
 ゐ 井14 7* (井2 1* 石井…)
 ゐる 居91 (居74 居明… 家居…) 座9 (座7 座待月 雲座隱) 坐2
 (坐2) 集1 (集1) 侍宿2 (侍宿)
 ゑ 画1 (画1)
 ゑむ 咲7 (咲5 咲麻我理 花咲) 咲1 (花咲1)
 を 男15 (男餓鬼 左男牡鹿…) 雄14 4* (雄心 英雄…)
 を 尾18 (尾5 尾羽… 乱尾…)
 を 麻11 (麻筍… 続麻…) 芋1 (芋原)
 を 緒77 (緒19 緒絶 沐緒…) 弦2 (弦1 都良弦) 糸1 (七糸)
 を し 鵜1 (鵜1)

をす 食11 (食8 聞食…) ※御食2

をる 折57 (折26 折返… 手折…)

〔備考〕傍線の漢字は、第一項でその定訓を抽出し得た諸漢字である。尚、*印は、詞書・左注における使用例数である。

〔補考〕

右で、掲出二五六項目中、二四三項目について、先に定訓を抽出し得た漢字がその定訓を介して語を表記する際の最も使用度の高い漢字となっている。かように、その定訓を介して借字表記に供された諸漢字は、一方で又、語の正字表記に供される場合には、最も使用度の高い漢字群ともなるのであって、両事態成立の背景には、定訓の介在ということを想定せざるを得ないのである。中に、「干」「切」「狭」「檣」諸字など、借字表記に使用されながら、正字表記としての使用例の存しないもの、又「云」「晩」「塞」「付」「照」「並」「喫」「干」諸字など、正字表記としての使用度から推して借字表記に供され得る可能性が存しながら、その例の求め得ないものなどもあるが、それらは限られたものであり、総体的には上述の如き状況を呈するのである。従って又、かかる実情より推測すると、借字表記などを通して検証することはできないのであるが、正字表記に供された諸漢字中最も使用度の高い他の諸漢字についても、右と同様の定訓の存在を想定することができるのではあるまいか。当時、そのような定訓の存在を前提にして、それら正字表記に従う漢字表記語の読法が保証されていたと考えるのである。

三 結 語

『万葉集』の借字表記を利用して、上代における漢字の定訓につ

てその語形の確認を試み、相当数の漢字についてその語形を抽出することができた。このことは、従来、漢字の定訓について語形の確認が得られぬままに進められていた上代における漢字・漢字文研究に、有力な根拠を提供することになる。

右に抽出し得たところでは尚、それが『万葉集』の、しかも真仮名の借字表記に限定しての資料に基づくもので、上代における漢字の定訓についてそれを有する漢字群の広がりを確認するまでには至らなかった。その点については、次の諸点に注目することに依って、更に確実な情報を得ることができであろう。

- 1 漢字彙の意味領域ごとに、定訓の確認された漢字を整理し、それらとの関連で、それが存する同じ領域の他の諸漢字について定訓の存在とその語形とを推定する。
- 2 定訓の確認は尚得られていないが、正字表記に供された諸漢字中、最も使用度の高い漢字群について、定訓は存在するものと想定する。

- 3 同語異表記に供された諸漢字について、当該漢字間に介在する共通の和訓を想定し、その語形を推定する。そのような和訓は、定訓と認定することが尚留保せられるにしても、少なくともその基盤を形成する和訓群であることは確かであろう。

それら定訓を有する漢字群の広がりを確認することは、上代における漢字使用の基盤を解明する上で極めて重要なことと思われるが、その具体的検討は、今後に期することとする。